

熊本花菖蒲の発展に努め、一般植物の増殖技術を教示した西田一声

横浜市 椎野 昌宏

西田一声は日本の伝統園芸花である花菖蒲のうち、特に熊本系（肥後系と表現しても良い）を育種し広めた西田一族の中核をしめる存在でした。天保年間に肥後藩主であった細川斉護（1804-1860）が、江戸の旗本松平左金吾（号を菖翁という）から数種の花菖蒲の苗を分譲してもらい、それをもとに家老の吉田潤之助が中心になって改良して肥後系の花菖蒲の祖型が作られました。肥後藩主は代々、武士のたしなみとして花作りを奨励したため、熊本地域は園芸文化のルツボとなり、肥後6花と呼称される肥後菊、肥後椿、肥後山茶花、肥後花菖蒲、肥後朝顔、肥後芍薬を生み出しました。文武両道の気概が伏流水となって西田一族にも流れ、熊本花菖蒲が完成されたものと思います。

（肥後花菖蒲から熊本花菖蒲へ）

祖父の西田貞幹を継いで父の信常（1862-1938）も花菖蒲の愛好者の集いであった満月会に所属し品種改良に尽くしましたが、同会が花菖蒲苗を門外不出としたことに疑問をもち、このような優れた品種群は広く世に公開すべきであると決意して信常は退会しました。そして大正12年（1923）、東に向かい遙か横浜の地に居を移して衆芳園を立ち上げ、花菖蒲に熊本の名を冠し、熊本花菖蒲として発表し販売を始めました。信常は長男の久（一声）、次男の力、三男の幾、四男の勇、五男の保と後継者に恵まれ、協力して熊本花菖蒲を全国に広めました。（注：四男の勇は戦後、昭和63年～平成8年（1988-1996）日本花菖蒲協会会長を務める。）

西田一声の生い立ち

長男の久は後に一声と号しますが、明治29

年（1896）に熊本市薬園町に生まれました。熊本県立農業学校を卒業し、大正元年（1912）に兵庫県山本（宝塚市）でバラや花卉園芸について修業し、大正4年（1915）から父信常の花菖蒲を中心とした園芸業に従事しました。一声も父や兄弟とともに盛んに花菖蒲の栽培や育種をしました。

昭和6年（1931）に日本花菖蒲協会が創立された際にその式典で父信常が熊本花菖蒲について講演し、また日比谷公園に肥後菊、肥後芍薬とともに多くの花菖蒲を展示しました。東京市民にとって熊本花菖蒲の優雅な品格と豪華な花容を目の当り観賞できた初めての機会であったようです。これによって肥後系の熊本花菖蒲が園芸界で堂々と認知されたわけです。信常は日本花菖蒲協会の顧問としても後進を指導し、昭和13年（1938）に逝去しましたが、協会の恩人として記録されています。

戦前における一声の歩み

一声は昭和12年（1937）に小石川植物園に勤務し、植物の栽培、研究に従事しました。同年開催されたパリ万国博覧会（5月～10月）に建築家坂倉準三の設計した日本館に展示された盆栽作品の手入れと宣伝のため一声も渡仏しました。日本の盆栽が海外で注目され始めた段階でした。昭和16年（1941）からは東京市滝野川地区（現在の北区）に本店をおく種苗業の老舗、帝国種苗殖産株式会社的小金井農場長となりました。同社はバラの栽培と販売でも知られ、一声は皇居のバラ園の手入れを行い、昭和天皇に拝礼の栄を得たことがあると家族に語っていました。昭和17年（1942）には小石川後楽園の大池前広場にある有名な〔馬場桜〕が樹勢衰退し瀕死の状態

にあったのを、当時樹木盆栽の名人と讃えられていた平尾彦太郎翁の監督により、同僚の市川政司と共に助手として周到に根接苗木を準備し、生き返らせる作業を行い、見事成功させたという記録が残っています。此の経験と成果により後年一声が植物の接ぎ木や増殖の専門家として解説本を出版するきっかけになったと思われまゝす。（注：市川政司（1888-1961）は東京市の造園技師として、井下清の部下として活躍し、桜、梅、ハス、花菖蒲の会の設立に貢献した。井下、市川は昭和6年（1931）日本花菖蒲協会設立時の理事、更に井下は昭和37年～48年（1962-1973）日本花菖蒲協会会長を務める。）

この後、一挙に日本は敗戦へと向かいますが、横浜の衆芳園の花菖蒲も戦災の被害を受け、絶滅にひんしましたが、幸いに当時小金井に住んでいた一声の農場に疎開させ、次男の西田力とともに品種の保存と改良に務めた結果、重要な品種群は戦後に残されました。

一声の作出した花菖蒲

一声が花菖蒲を作出した時期は戦前から終戦直後にかけてと思われまゝす。伝統に輝く衆芳園の熊本花菖蒲カタログ平成3年版には一声の作品として50品種掲載されています。うち現在も花菖蒲愛好家や花菖蒲園で栽培されている品種は紅色系の岩戸神楽、朱盃の友、猩々殿、紅珊瑚、紅牡丹、舞姫、万歳楽、白色系の友鶴、槍ヶ岳、立浪、白澄、紫色系の崑崙、藍色系の滄海等があります。代表的な品種は〔友鶴〕で純白三英の大輪花で、花弁は厚く少し波打ち形良く、とくに芯の形がすばらしく、花容全体に気品と風格があり、白花の模範と評価されます。昭和20年頃（1945）に作られたと言われ、戦争直後の食糧難のどさくさ時代によくもこのような名花が生まれたと感心します。これを親にして、平尾秀一が清鶴、鶴ヶ城の優秀花を作出しました。以下衆芳園カタログより友鶴以外の上記品種と

その解説を引用してみます。

岩戸神楽	濃赤小豆色正花六英大盛り上がり深咲巨大輪
朱盃の友	濃赤小豆色働花六英巨大輪
猩々殿	濃紅赤色正花六英深咲巨大輪
紅珊瑚	白地に紅深覆輪白大筋入働花六英
紅牡丹	濃紅色に白小筋入正花六英
舞姫	白地に紅覆輪正花六英
万歳楽	濃紅小豆色大立芯働花六英巨大輪
槍ヶ岳	雪白色大立芯盛り上り深咲六英晩生巨大輪（本会報の表紙に掲載）
立浪	雪白色大芯正花三英巨大輪
白澄	雪白色大盛り上り大芯働花深咲巨大輪
崑崙	濃黒赤紫色極厚弁正花六英巨大輪
滄海	濃澄藍色底白に白大筋入り大芯深咲働花六英巨大輪

（注：正花とは雌芯が正しく三方に配置され花容整然としているもの。働花とは雌芯がいくつかに分裂して花びらに芸を生じているもの。因みに友鶴は働花。）

日本花菖蒲協会では毎年6月中旬に鎌倉の大船フラワーセンターで花菖蒲の展示会を開催していますが、金屏風の前にその日開花している優秀花を7鉢並べる、1鉢おきに白花を、3英咲きの隣には6英咲きをおく、中央に丈の高いものを、両はしにむかってやや低いものを配置する展示様式をとっています。このような儀式といってもよいやり方は肥後出身の西田家から教示されたものと思ひまゝす。因みに一声の〔友鶴〕は金屏風の前に登場することが多い良花です。（注：西田式観賞法は金屏風を背にした室内展示で、正座し、先ず花菖蒲に一礼し、目線で見たと、立ち上がり、一花一花を花の真上から見るという観賞儀式を執り行っていた。）

戦後の植物園芸復興期にバラや花木の実務書 を出版

戦災によって壊滅状態に陥った植物園や園芸界を回復させ、人々に草木作りによって楽しみと希望をあたえようと一声の活動が始まりました。神代植物公園で後輩を指導し、芍薬、椿等の分類や、品種名のチェックを行いました。帝国種苗殖産時代のバラ栽培と研究の経験を活かし、[バラの趣味栽培] 昭和31年(1956)、[バラ作り] 昭和36年(1961)を加島書店から出版しました。

また歿後昭和48年(1973)に加島書店より出版された遺作[庭木・草花ふやし方の技術]は植物の保存の必要性を説く一声の集大成で、多くの植物類についてそれぞれ、種子の撒き方、株分け、挿し芽、挿し木、接ぎ木等の人口繁殖法を写真や図で示し、平易な文章で分かりやすく、詳細に手ほどきしています。当時の園芸業者や一般栽培家の具体的参考書として有用されたものと思います。一声の博識と実際家の側面が逐条に表れた良書です。

一声の人となりと交友関係

今回執筆するにあたり私は一声のお子様たちに色々取材することが出来ましたが、好意的に対応されました。お父さんは寡黙な人で、厳しい面もありましたが、頼れる家長として皆に慕われていました。

一声は19才の時、宏道流の生花師範免許を受け、それから折にふれて、華道を人々に教えたようです。宏道流は江戸時代中頃に望月義想(1722-1804)によって始められた流派で、長い歴史を持ちます。中国の花書[瓶史](1600)を参考にして、細長い花瓶に花を縦長に活け、自然の花の風情を花瓶のなかで風流に表現する方式で、今日も続いている流派です。

また彫刻家の朝倉文夫(1883-1964)とも熊本の同郷であった関係から深い交友関係が

あり、植物愛好家であった朝倉に苗を送ったり、栽培技術を伝授したようです。朝倉も東洋蘭の栽培を熱心に行ない、昭和15年(1940)には[東洋蘭の作り方]三省堂書店という本まで出版しています。また朝倉は生け花、盆栽にも詳しく、一声は朝倉の子女たちに自身の宏道流の生け花を教えたりして、家族ぐるみの交流もありました。

趣味としては謡曲に凝り、よく自宅で歌っており、また大のカメラ好きで絶えず植物や風景をあちこちで撮影していました。このように多彩な趣味が彼の園芸植物人生を彩りつつ、昭和46年11月9日東京都世田谷区用賀で逝去されました。享年75才でした。一声には文武両道を志とする肥後の伝統的気迫が内蔵し、周りを照らした灯台のような存在でした。

コラム

熊本花菖蒲の特徴

花びらは厚く、開花(落ちるといふ)して2日目より光沢の強い縮緬地となり、しだいに大きく拡がり(伸びるといふ)第3日目の満開時には径20cmから30cmにも達します。富士山形に垂れ拡がり弁先に少し力を持って観賞の最高潮となります。この間、寸時も静止することなく、花容の少しずつ変化する様は他の植物には見られぬところです。この時を過ぐるとしぼみ始めます(これを巻くといふ)。豊かに重なりあった花びらのこの花の中心に、雌蕊が三方に厳然として気高く立っています。熊本花菖蒲の花の生命はこの雌蕊にあると云っても過言ではありません。品種改良はこれを主眼として行われるのです。熊本系の椿も芍薬も茶梅なども第一に芯を取り上げていますが、これを軽視してはその特長のないことを特記しておきます。

《平成2年6月衆芳園カタログより転載》